

## 複数の河内西国三十三所霊場について

柴 谷 宗 叔

### 一 はじめに

巡礼研究を進めて行くにあたって全国各地に成立した西国三十三所・四国八十八ヶ所の写し霊場の存在は無視することができない。ところが、大阪府の旧河内国内には西国の写し霊場として同名別個の二霊場が現存する。交野・枚方・寝屋川周辺の河内西国三十三所霊場（以下「北河内」と、東大阪・八尾周辺の河内西国三十三所霊場（以下「中河内」）である。なぜ同名の霊場が成立したか調べていくうち、上記の現存「北河内」「中河内」以外にも河内西国霊場があったことがわかってきた。少なくとも五つの系統があり、同系統の札所の変遷を加えれば十種類が確認できた。

### 二 北河内

北河内は、明治二十年（一八八七）、大阪・高麗橋の足袋店・岩木屋の津田元治郎（一八一四―八九）が發起人となり、現在

の札所に観音像を奉納して回ったのが始まりである。各札所には本尊とは別に元治郎が納めた観音像が安置されているのを私は確認している。枚方市の郷土史家・中島三佳氏方に保存されている明治二十年発行の『河内西国三十三所観世音順拝詠歌』の奥付には、「信州善光寺大本願講 發起人津田元治郎 世話方講中」とある。元治郎は文化十一年（一八一四）磯島村（現枚方市）の神野家の二男として生まれ、のち岩木屋に婿養子に入ったとされる<sup>(1)</sup>。

北河内は明治、大正期にはよく巡拝されていたが、昭和になって廃れ、戦後は参拝する人もいなくなっていた。昭和五十三年に中島氏がこの詠歌集を自宅で見つけ、大塚日出男氏らと「宿場町枚方を考える会」を結成、再興を試み、同六十一年にガイド本『河内西国三十三所観世音めぐり』を発刊した。しかし寺院側からの霊場会結成の動きはなかったという。私が巡拝した時（平成五年）には無住の寺があり、一部の寺以外は巡拝者受け入れに熱心ではなかった。自坊の

ホームページで河内西国の紹介をしている寺に<sup>(3)</sup>しても「現在は巡礼する者はまずいない」と言っているほどである。

### 三 中河内

中河内はどうか。河内西国霊場会発行の『やすらぎの古里河内西国巡礼こころの散策ガイド』(平成十五年)によれば「もともと江戸時代からあったものですが……」とある。典拠を調べたが取材を進めるうち、現存札所のことを指したものはなく「河内西国」という名の霊場が江戸時代にあったという<sup>(4)</sup>ことを述べているに過ぎないことが分かった。

現存の札所の原型となったのは、意外に歴史が新しく、昭和五年である。縄手村(現東大阪市)の往生院の豊島英海師が中心となり旧中河内郡内の寺院に呼びかけ結成した。その設立には当時珍しかった大型オートバイを使って東奔西走したというエピソードが残っている。<sup>(4)</sup>同年、同院から発行された川口蓮海『河内新西国三十三霊場順拝のしほり』には「河内新西国」とあるから、発足当時は「新」の名をかぶせ、別の「河内西国」が存在していたことをうかがわせる。

しかし戦中戦後は衰退し、巡拝する人がいなくなっていたという。そこで昭和五十年に八尾市の山田大氏によって再興が計画される。山田氏はガリ版刷りで『しほり』を復刻、同五十一年には寺院側が「河内西国霊場会」を結成した。「新」

複数の河内西国三十三所霊場について(柴谷)

が入っていないことに注目してほしい。山田氏によると、結成総会時に別の「河内西国」があることは知らなかったという。ここに同名霊場が併存する事態となったのである。また、この時に納経困難な一部の札所の差し替えが行われた。

なぜ元々中河内だけだったのが南河内まで広がったのか。少なくとも昭和五十一年再興時の設立総会議事録には南河内の寺院の名は無い。寺院側に取材したところ、南河内に広がったのは昭和五十六年。同年十月に八尾西武百貨店で出開帳をすることとなった。その企画中に納経困難かつ出開帳に非協力的な寺院を差し替えることとなったという。そのおり、一部寺院から「巡拝者を増やすために、自力で客を集めることのできる有名寺院を入れよう」との提案があったという。<sup>(6)</sup>その結果、南河内地域にある叡福寺と楠妣庵が加入することになった。また、中河内の場合、再興時の経緯から、納経して回るといふことに重きを置かれている。このため、たびたび札所の差し替えを行っている。

### 四 その他

その他の「河内西国」については、上野勝己氏が「石川三十三所の成立と変遷」<sup>(7)</sup>という論文の中で言及している。これによると、弘化二年(一八四五)の『河内西国三十三所詠歌』<sup>(8)</sup>に記された札所寺院が北河内地区にあり(A)、それと

## 複数の河内西国三十三所霊場について(柴谷)

一五四

地域と一部寺院が重なるものの番付から見て別の系統といえるのが現在の北河内(B)、明治前期の妻谷民三郎編『河内一州三十三所霊場案内』(C)に見える旧河内国全体に広がる広域霊場、現在の中河内の原型(D)といった四系統があることがわかる。

河内西国の歴史について田中智彦氏は承応三年(一六五四)<sup>(9)</sup>以前としているが、札所の詳細が述べられていないので、どのようなものであったかを確定するのは困難である。上野氏は元文三年(一七三八)に枚方中宮の西方寺に河内西国三十三度回向の如意輪観音石仏が造立されたことなどから、Aにつながる系統であるとしている。また、北川宗忠氏は文化九年(一八二二)の『河内一州三十三所巡礼道中記』<sup>(10)</sup>を挙げている。これについても詳細ははっきりしないが、上野氏はこれをCにつながるものではないかと推測している。

次にAとBの関係である。これについて上野氏は別のものであるとしている。確かに札所の番付などからはそういえるであろう。中島氏を取材したところ、A十四番の万年寺が明治の廃仏毀釈で廃寺となりB三番の浄念寺に仏像を移管していることを指摘。私の調査でも、廃寺となったA十六番観音寺本尊がB十九番西雲寺に、A二十八番観音寺本尊はB番外光明寺に移管されていることが判明した。Bを作った津田元治郎氏は「復興」と言っていることから、Aを復興しようと

したが、札所の寺の多くが廃仏毀釈で無くなってしまったため、やむなく明治二十年当時現存していた寺院を札所として再編成したのではないかとということである。

また、松原市文化情報振興事業団の出した小冊子『第十八回特別展河内西国巡礼と松原』(平成十九年)には昭和初期の一枚物の案内図『河内西国巡拝コース』(E)という資料も示されている。富田林・浄谷寺に保管されていたもののコピーが松原市・西方寺にあったという資料である。Cに重なる寺院も半分近くあるが札所番付が全く異なる。上野氏の示した四系統以外のものであることは札所番付などからみて明らかである。

## 五 結論

以上をまとめると、まずAの前身の「河内西国」が江戸時代に北河内に成立、さらにこの区域を外したCの前身とみられる「河内一州」が江戸後期に中・南河内に開設される。明治の廃仏毀釈を経て、Aが廃れ明治二十年にBが北河内に開設される。昭和五年になってDの「河内新西国」が中河内に開設される。同時代に別系統のEも存在するがあまり知られなかった。Cは昭和五十年頃の三宅徳和会(松原市)の奉納幕<sup>(11)</sup>を最後に衰退して無くなってしまふ。Dは昭和五十一年「河内西国」として再興、札所の差し替えを行いながら現在に至

る。この間一部札所の異なる六種の番付がある。これを合わせ五系統十種類とした。衰退していたBを紹介する冊子が昭和六十一年にでき一時的に北河内が再興したが、現在また衰退の道をたどっている。これが現時点での私の結論である。

歴史的には北河内の方が古くからあったが、中河内が昭和五十一年の再興時に北河内の存在に気付かず同名霊場が誕生することになったのは、本論文で述べた経緯の通りである。そして同六十一年に北河内が再興されると、併存することになったのである。そして、北河内が再興当時の札所を固守しているが故に一部納経困難で衰退しているのに比して、中河内は巡拝者優先で納経困難札所を適宜差し替えながら、その範囲を南河内に広げ名刹を取り込むことによって、巡拝者に魅力的な霊場としてPRし、新たにガイドブックも作り、現在なお巡拝者を多く集める霊場として存続しているという対照的な推移をたどっていることも報告しておきたい。

- 1 『磯島と明照山正光寺』（昭和五十五年、正光寺）
- 2 二十一 番雲林寺
- 3 十六 番想善寺
- 4 『岩瀧山往生院六萬寺史』（昭和五十四年、往生院六萬寺）
- 5 昭和五十一年十一月二十日、於勝軍寺
- 6 現札所寺院からの聞き取りであるが取材源秘匿のため省略
- 7 『太子町立竹内街道歴史史料館館報』第八号（平成十四年、

複数の河内西国三十三所霊場について（柴 谷）

同館）

- 8 上山昭則「河内三十三所詠歌と十七番宇山村奥堂院」（『まんだ』二十八号、平成八年）所収の「弘化二年改 河内西国三十三所詠歌」

- 9 「近畿地方における地域的巡礼地」（『神戸大学史学年報創刊号』平成八年、神戸大学史学研究会）

- 10 『全国「三十三所巡礼」総覧』（平成七年、流通科学大学）

- 11 「河内一州」五番龍泉寺（富田林市）など複数の札所に奉納。幕には「楽な巡礼溢るる功德河内西国」と記され「一州」の字はない。三宅徳和会は昭和三十八年の結成で、現在に至るまで四国・西国ほか各地の霊場を巡礼している。昭和五十年代に河内西国以外にも四国八十八ヶ所などに幕を奉納している。今回妻谷氏の曾孫である妻谷信氏に取材したところ「父や曾祖父から何も聞いていない」とのことで確認は取れなかった。上野氏論文でも推定されるように、奉納当時すでに「一州」巡拝は廃れていたこともありうる。Cに基づいて奉納したものの、実際は別のDしか機能していなかったということが考えられる。

〈キーワード〉 観音巡礼、河内西国、写し霊場

（高野山大学大学院博士後期課程）